第11回FMESシンポジウムルポ

情報の窓

桑畑　暁生（(財)電力中央研究所）

第11回FMESシンポジウム「グローバリゼーションにおける経営工学の役割」が平成7年6月30日，日本学術会議講堂にて開催された．当日の参加者は160名を数え，参加者の関心の高さを伺わせた．まず，日本学術会議経営工学研究連絡委員会（FMES）委員長　大島栄次先生の開会の挨拶を皮きりに特別講演，パネル討論会が催された．

最初に「アジアにおける日本的経営－日系企業で働く一万人の評価－」と題して東京工業大学の今田高俊氏より講演が行なわれた．

今田氏は東南アジアにおける現地調査をもとに第二次大戦での侵略者としての日本と，経済的成功者としての日本というジレンマを抱える日系企業内での問題の分析と解決の方向を示唆された．その分析では，日本人だけでなく，東南アジアの各国民に対するイメージ，特徴もインタビューにより抽出し，日系企業のあるべき姿を構築することを試みている．その結果，日系企業の雇用の安定性，公平性は評価されるものの，その他の点では他国系企業に勝るとはいえず，また日系企業側が期待する雇用の定着指向は国別に大きく異なり，全く効果のない国もある．これらの点を考慮して，雇用条件を検討していく必要があると指摘された．

次に「グローバリゼーションとPL（製造者責任）」と題して九州大学北川俊光氏からの講演が行なわれた．

北川氏は製造物による損害を守るための法律と経営工学の役割という観点からご講演していただいた．商品市場のグローバル化の中で，世界のマーケットの単一化が進んでいる現状では，企業はPL法の制定により製品の設計段階から製品による事故を予見し技術的改善や警告による事故回避を念頭におく必要がある．企業としては事故後に損害賠償裁判で負けることが問題なのでなく，設計段階で改善，安全性を確保することがPL法で求められていると主張された．そのために製造責任回避技術を確立し，世界の市場に広めていくことが経営工学に求められていると指摘された．

講演の最後は，㈱東芝　常任顧問　高柳誠一氏より「グローバリゼーション下における研究開発マネージメント」と題してお話しいただいた．この講演では，グローバリゼーション下の研究開発マネージメントはいかにあるべきかを中心にお話しいただいた．その中では，国内研究開発の質の向上のためには問題提起型の組織づくりが重要であることや，研究拠点の世界展開をはかるためには比較的小さな研究所でプレイングマネージャーの存在が重要になるという指摘をされた．国際共同研究開発は資金と人的資源の分担や，文化混合などのメリットも大きいがマネージメント負荷が増大し，契約交渉などのデメリットも大きいと話された．

コーヒーブレイクの後，パネル討論会が催された．東京大学　久米均先生をパネルリーダーとして特別講演をいただいたお三方に加え，キッコーマン株式会社代表取締役社長　茂木友三郎氏をメンバーとして，活発な討論が行なわれた．

茂木氏は世界展開する企業経営の実務の観点から，日本の横ならび意識，洪水的輸出，現地雇用を促進しないなど，日系企業の問題点を指摘され，これらのグローバリゼーションにおける摩擦の回避のためには，いくつかの重要なポイントがあると話された．それらは，自主性を重んじるということ，利益追求を明確にすること，海外進出に際してはフィージビリティスタディを十分に行なうことなどだとまとめられた．またフロアからは，事故回避のための安全コストは製品にそのまま転嫁することで製造者責任問題は解決するのかという質問が寄せられ，欠陥概念が明確でない現在は判例待ちであり，この問題は安全性とコストのトレードオフで簡単には解決できない問題であるとのコメントが寄せられた．

最後に，東京大学　伏見正則先生の閉会挨拶の後，本シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じた．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．